

「フィリピン」特集vol.3

昨年度の創刊号・第2号に続き「知っていそうであり知らないかもしれないフィリピン」特集です。今年度も、中井中学校にはフィリピンルーツの仲間が8名いますよ。

前2号でフィリピンの地理や言語（ことば）にスポットを当てましたが、今回から歴史編！

※前2号が気になる人は、国際教室前に掲示してありますので読んでみてください。

フィリピンの歴史「4つの区切り」

比の歴史は次の4つに分けるとわかりやすいです。

1. 集落「バランガイ」の時代 ～1565年
2. スペインによる統治時代 1565年～1898年
3. アメリカ統治と太平洋戦争 1898年～1945年
4. 独立から現代 1945年～

1. 「バランガイ」の時代

イスラム教が入ってくるまで、比に統一国家・中央政府はなく、小規模集落「バランガイ」が各地に点在していました。1バランガイは30～100世帯、数千から数万人の規模でした。バランガイとは当時の比の人々が移住や移動に使っていた木造の帆船balangayに由来します。

バランガイ内は次のような階級社会でした。

ダトゥ（首長）

最高指導者、軍事・裁判・行政の権限あり

マハリカ（貴族・戦士）

ダトゥを支える特権階級、税金免除、戦時の兵役義務

ティマワ（庶民）

自由民。私有地保有、職業選択自由、労務義務

アリピソ（従属民・奴隷）

借金・犯罪、戦争捕虜で身分が落ちた人々

バランガイは決して閉鎖的な集落ではなく、中国やアラブ世界とも貿易を行う海洋国的側面がありました。他国との貿易を円滑に行うため「パイ・イン」と呼ばれる独自文字を竹や竹葉、樹皮に刻んで契約や記録を残していました。独自の秤（はかり）も持っていたそうです。

元々はアニミズム（精霊信仰）がベースでしたが、14世紀から15世紀にかけてブルネイやマレー半島経由でイスラム教が伝わりました。南部ミンダナオ島からマニラ周辺までイスラム化が進み、ミンダナオ島やル諸島にはイスラム王国が成立するようになりました。

現比でも地方自治体の最小行政組織（日本の「町内会」や「自治会」のようなもの？）は「バランガイ」と呼ばれ、全国に4万以上存在し、それぞれにバランガイ・キャプテン（区長）や警察機能、コミュニティセンターを持っています。



2. スペイン統治時代（なんと300年以上！）

マゼラン率いるスペイン（以下「西」）の艦隊が1521年、比中部セブ島に到達して以降、西は比領有を目指すようになりました。1543年比中部に到達した探検家ピリャウスの遠征隊が、サル・レイテ2島を当時の西皇太子フェリペ（Felipe・後の西国王フェリペ2世）に献上しようとして、両島をフェリペにちなんで「フィリピン諸島（Las Islas Filipinas）」と名付けました。これが現在まで続く比の国名「フィリピン」のルーツです。

【1543年は、種子島に鉄砲が伝わった年ですね。】

当時の西は、キリスト教（ローマカトリック）布教を名目に国外進出を図っていて、これ以降比に多くの宣教師が来てカトリックが広まっています。創刊号でふれましたが、現在の比がASEAN唯一のキリスト教国となっている起源がここにあります。

西の進出は比中部から始まりましたが、当時さらに南の現インドネシアに進出していたポルトガルとの争いもあり拠点を北へ移していきます。初代フィリピン総督であったカスティーリャは、天然の良港を持ち、すでに中国や周辺地域との交易の中心地であったルソン島マニラに目を付け、現地勢力を排し1571年首都としました。現比首都マニラの誕生です！【マニラの語源は、地元タガログ語の「マニラ」で、「ニラッド」という植物が生い茂る場所」という意味だそうです。】

当時西は、メキシコ（以下「墨」）やペルーなど中南米をすでに支配しており、大西洋を渡って本国と墨のアカプルコを結ぶ定期航路ができていました。

さらに、アカプルコとマニラを結ぶことで、アジア産のぜいたく品である中国産生糸・絹織物・陶磁器などが西本国にもたらされるようになりました。

これらのぜいたく品買い付けには、中南米産の銀が使われました。当時、西本国では金1gを銀13gと交換しなければならないのに対して、中国では金1gを銀7gで交換できたという背景もあり、中南米産の銀を中国で安く金に交換するだけで莫大な利益をあげることができました。こうしてマニラは、アジアと西本国をつなぐ貿易の重要なハブ港（中継地）として存在感を増していきました。

当時は大型帆船「ガレオン船」が使われたので、西本国とアジアをつなぐ、壮大な貿易を「マニラ・ガレオン貿易」と呼びます。

現比の各言語に西語起源の語句が多く、比の人々の名字もスペイン風が多い訳は、こんな歴史にあるのです。【つづく...】



日本人商人 呂宋助左衛門（るそんすけざえもん・本名：納屋助左衛門なやすけざえもん）

スペイン統治時代の初期、日本と比の貿易を進めた商人の一人が納屋助左衛門です。和泉国堺（いずみのくににさかい・現大阪府堺市）出身の商人で1593年頃ルソン島マニラ（現首都）へ渡りました。そこで仕入れた安価な陶器を日本に持ち帰ったところ、時の茶人・千利休や天下人・豊臣秀吉の注目を受けました。

彼の持ち帰った陶器は比で日常生活に使われる（食料や酒・油などを湿気から守り保存する）容器でしたが、日本では茶の湯の必需品である抹茶を保存する最高級の茶器とされたのです。しかも中国産の高級茶器「唐物・からもの」に比べて派手さがなく、形がゆがんでいたりすることが、利休の追い求める「侘寂（わびさび）の美」に合致したのです。

秀吉は助左衛門から仕入れる容器を「呂宋壺（るそんつぼ）」と呼びました。助左衛門は壺を大変な高額で秀吉や全国の戦国大名に売りさばき、巨額の富と商人としての名声を得ました（壺ひとつで城がひとつ建つくらいの値段だったとか..）。

しかし派手な暮らしぶりが目立つようになり、1598年彼はついに秀吉から邸宅・財産没収処分を受けてしまいました。実は処分直前、先手を打って豪邸や財産を寺社に寄進して堺を脱出していたそうです。再度ルソン島へ渡り、その後カンボジアで国王に重用され、商人としてさらに成功を収め、その地で生涯を閉じたとされています。